図書館ではじまって

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
図書館ではじまって

【Ｎコード】
Ｎ２１９４Ｓ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
嫌々図書館に行った。ところがそこで。べたですがそれでも奇麗な恋愛ものを意識してみました。

第一章

図書館ではじまって

図書館に来たのは嫌々だった。

脇田嶺浩は茶色がかった黒髪の持ち主だ。アーモンド形の二重の目で眉は少し薄い一文字が少し斜め上になっている。

厚めの唇は引き締まりやや横に広い。細めの頬で花の形もいい。背は一七五程で空手をやっているだけありかなり引き締まっている。

その彼が何故この図書館にいるかというとだ。宿題の為だ。

大学の講義のレポートを今から書かないといけないのだ。それで資料を探しに来ているのである。

見渡す限り本棚が並んでいて席もある。中は暖房が効いていて快適だ。しかし彼の顔は今一つ晴れず憮然としたものであった。そしてこう呟いた。

「仕方ないな」

いきなり不平不満からだった。

「学校の宿題だしな」

また不平不満の言葉だった。

「しかし哲学か」

講義はそれなのだった。

「それでショーペハウアーか。誰だよそれ」

いぶかしむ顔でまた言うのだった。彼は哲学には疎い。彼は法学部にいる。何故哲学の講義を取ったかは理由があった。

「簡単に単位が取れるけれどな」

それでもだというのだ。そしてだった。

とりあえず探した。だが全然わからない。そのショーペンハウアーという人間の作品が何処にあるのか全くわからなかったのだ。

暫く探したが見つからずだ。彼はここで考えを変えた。

「そうだな、ここはな」

カウンターに行くことにした。するとそこにはだ。
涼しげな目でだ。一見するとボブの女の人がいた。
髪は一見すると確かにボブだ。だが後ろの一条の髪がかなり長い。それが腰のところまである。涼しげな大きい目に小さな唇を持ち鼻は高い。そして膝までの黒いタイトスカートに同じ色のベストとネクタイ、白いブラウスという格好だ。ストッキングも黒である。
胸がかなり大きくウエストは細い。恐ろしいまでの見事なスタイルだ。
その女の人にだ。彼は尋ねた。
「あの」
「何か」
クールで落ち着いた大人の女の声だった。
「何か用か」
「ショーペンハウアーの本は」
その探している本をそのまま尋ねたのだった。
「何処なんでしょうか」
「ショーペンハウアーか」
「はい、ありますよね」
「ないと言えば嘘になる」
その女の人はこう答えた。
「それはだ」
「あるんですか」
「ある。それを借りたいのだな」
「はい、借ります」
また話す嶺浩だった。
「ですからそれは」
「わかった。それではだ」
その女の人が立ち上がった。背は意外と低かった。一六〇程だ。
その抜群のスタイルからは少し違ってだ。そんなに高くはなかった。
その彼女がだ。話すのだった。

「こちらだ」
「こっちですか」
「ショーペンハウアーは哲学者だ」
その女の人が話す。
「ドイツの有名な哲学者だ」
「ドイツのですか」
「そうだ、厭世哲学といってな」
「厭世哲学？」
「要するにこの世を疎ましいという考えだ」
その哲学の本棚に彼を案内しながら話す彼女だった。
「まああまり明るい考えではないな」
「この世が疎ましいって考えるんならそうですね」
「そうだ。ひょっとして君は」
前を歩いていた彼女がだ。嶺浩の方を振り向いてきたのだ。
「この世が嫌いなのか」
「いえ、別に」
それは否定する彼だった。
「俺、別にそこまで暗くないですから」
「しかしショーペンハウアーを読むとなるとだ」
蛍光灯で照らされた白い天井と木の黄色い床の間の世界で話す。

第二章

「この世を儚んでではないのか」
「学校の宿題で使うんで」
「それか」
「それです。哲学の授業で」
「ふむ。そういえばだ」
ここで彼女は嶺浩を見た。そしてだ。
あらためて話すのだった。
「君は大学生の年齢だな」
「はい、大学生です」
そのまま答える彼だった。
「それで講義で」
「わかった。それならだ」
ここで彼女はだ。左手の本棚から一冊の本を出してきた。それは確かにショーペンハウアーの本だった。著者がそう書かれていた。
「この本がいいな」
「それですか」
「レポートを書くのだな」
「はい、そうです」
「ではこの本で充分だ」
また話す彼女だった。
「読むといい」
「わかりました。それじゃあ」
「学ぶといい」
彼女の言葉はここではこんなものになっていた。
「学べばそれだけ己のものになる」
「だからですか」
「そうだ、学ぶのだ」

こうしてその本を借りてレポートを書いた。そのレポートは見事優の評価を得た。しかし図書館に行くことになったのはこれが最後ではなかった。
まただった。今度もだった。
「何だかんだでレポート書かせる人だな」
同じ講義でだ。レポートを要求されたのである。
今度は誰かというとだ。彼は自分で呟いた。
「サルトル？猿の親戚か？」
こんなことを呟くのだった。
「それか？」
「いや、それは違う」
後ろからだ。彼女の声がしたのだった。
「サルトルは確かに猿に似た顔だったが猿ではない」
「その声は」
「久しいな、青年」
振り向くとそこにいたのはその彼女だった。今度は前と同じベストにネクタイにブラウスだった。だが今日はズボンだった。その服でそこにいたのである。
「またレポートか」
「はい、そうです」
「そしてそれを書く為にここに来た」
「その通りです」
「ふむ。それではだ」
今度はすぐだった。その本を出してきたのだった。
「これがいいな」
「その本がですか」
「借りるといい」
「それでレポートを書けるんですね」
「大学のレポートにはこれが一番いい」
その本がだというのだ。

「だからだ。ほら」
「すいません」6
嶺浩は彼女からその本を受け取ってから礼を述べた。そうしてその本を自分の手の中に入れてだ。それからまた言うのであった。
「けれどお姉さんって」
「合格だな」
「合格って？」
「お姉さんと言ったことがだ」
クールなその顔に微笑みを浮かべての言葉だった。
「それが正解だ」
「ああ、これですね」
「若しおばさんと言えばだ」
「駄目だったんですか」
「私は二十四だ」
その年齢を自分から言った。
「まだな。二十四だ」
「そうなんですか」
「君は見たところ二十歳だな」
「はい」
その通りだった。まさにその年齢だった。

第三章

「そうですけれど」
「ふむ。四歳下だな」
何かを考える目になってだ。また言う彼女だった。
「学ぶには最適の年齢だ」
「勉強に年齢が関係あるんですか」
「人生は生きている限り勉強だが」
それでもだというのである。
「それでもだ。二十歳の頃はだ」
「二十歳の頃はですか」
「そうだ、二十歳は青春だ。学ぶべき時なのだ」
「だからですか」
「学べ」
また言う彼女だった。
「いいな。それではだ」
「このレポートは」
「いや、そのレポートだけではない」
「これからもですか？っていうと」
「何かあれば来るといい」
こう言ってだ。さらにであった。
「いや、何もなくてもだ」
「何もなくてもですか」
「来るといい。学びたければな」
「俺正直なところ」
嶺浩は首を傾げさせてだった。こんなことを言うのだった。
「勉強は好きじゃないんですけれど」
「学校の勉強はだな」
「ええ、まあ」

その通りだというのであった。実際に彼は勉強は好きではない。一応そつのない成績を保ち大学にも通っているがそれでもだ。好きではないのだ。
「それは」
「それだけが学ぶことではない」
だが彼女はこう言うのだった。
「学校の勉強以外にも学ぶことは多くあるな」
「まあそうですけれどね」
「ならそうしたことを学べ」
これが彼女の言葉だった。
「いいな。それではな」
「わかりました。それじゃあ」
「私は何時でもここにいる」
彼女はこんなことも告げた。
「何時でも来るといい」
「わかりました」
こうして彼女との話を終えたのだった。そしてレポートを書いた次の日だ。彼はふらりとした感じでまた図書館に来たのだった。
するとだ。カウンターのところにまた彼女がいた。彼の顔を見ると笑顔になってだ。こう声をかけて挨拶にしてきたのだった。
「来たな」
「はい」
「よく来てくれた」
こう彼に言うのだった。
「それで今日はどの本を借りたい」
「今日は哲学書じゃなくてですね」
「他のものか」
「スポーツの本とかありますか？」
今日はそれだというのだった。彼の好みのジャンルである。
「それは」

「うむ、野球も空手も何でもあるぞ」
「野球もですか」
「ただし巨人の本はない」
それはないというのだった。
「私もこの図書館のスタッフの誰も巨人が好きではないからな」
「ああ、それ俺もなんで」
「君もか」
「俺広島ファンですから」
それが理由だというのである。
「巨人嫌いなんですよ」
「いいことだ。しかし広島か」
「はい、広島です」
「苦難だな」
いきなりとんでもない言葉であった。
「それはまたな」
「まああまり優勝できるチームじゃないですけれどね」
「しかし奇遇だ。私もだ」
「お姉さんもですか」
「また合格点だな」
そのお姉さんという言葉に反応してだった。そこだった。

第四章

「お姉さんだからな、いいな」
「ええ、そうですね」
「それでだ。私もだ」
「広島ファンですか」
「あの赤は好きだ。一番好きなのは白だがな」
「やっぱりそうだったんですね」
「確かに優勝から遠ざかっている」
これは紛れもない事実だった。どうしてもだ。
「だが。それでもだ」
「ええ、それでもですね」
「好きだ」
一言だった。
「子供の頃からな」
「俺もですよ。それでですね」
「広島の本だな」
「ありますか？それ」
「ある。それも豊富にな」
あるというのである。
「週刊ベースボールマガジンのバックナンバーもあれば増刊もある」
「本当に充実してますね」
「広島についての本もある」
そうした本まであるというのである。
「それで何を読みたいのだ？」
「優勝の時の増刊を」
「それか」
「ありますか？」
「無論全部あるぞ」

ここでも彼に対して微笑んで話す。
「全てな」
「じゃあまずはですね」
「うむ」
「八十四年のを御願いします」
「ほう、あの時のか」
「山本浩二と衣笠が一番よかった時期のを」
「一番いいか」
彼女はその言葉に目を向けた。
「そうか。君はそう思うか」
「もっと若い時の方がよかったんですか」
「二連覇の時が一番よかったと思うがな」
七十九年、そして八十年の時だ。
「あの二人は」
「そうなんですか」
「だがいい」
あらためて話す彼女だった。
「八十四年だな」
「その時の増刊を御願いします」
「わかった。それではだ」
こうしてだった。嶺浩はその増刊を借りたのだった。そうしたことを続けているうちにだ。彼は彼女の胸の名札に気付いたのだった。
「あっ、お姉さんの名前って」
「どうした？」
彼女は今はカウンターに座っている。そこから彼の言葉に応えているのだ。
「私の名前に何かあるのか」
「守誠っていうんですね」
「そうだが。ついでに言えばだ」
「ついでに？」

「下の名前は栄美という」
下の名前は自分から話すのだった。
「宜しくな」
「守誠栄美さんですか」
「そうだ。そして君の名前だが」
「脇田です」
この名前をだ。栄美に話した。
「脇田嶺浩といいます」
「脇田君か」
「はい。そういえば名前はお互い」
「知らなかったな」
「そうですね。本当に」
「しかし今お互いそれを知った」
栄美は微笑んで嶺浩に話した。
「いいことだな」
「いいことですか」
「少なくとも機能的なやり取りではなくなる」
「機能的なですか」
「それはなくなる」
また言う彼女だった。

第五章」

「だからな」
「それがいいんですか」
「人と人の付き合いだからな。機械と機械ではない」
「じゃあ」
「ではだ。脇田君」
実際に彼の名前を呼んでみせたのだった。
「今日は何の本を借りに来た」
「何の本をかですか」
「そうだ、何の本がいい」
「今日は借りるのじゃなくて」
「読みに来たのか」
「最近どうもですね」
嶺浩は少し微笑んでからだ。栄美に話す。
「本に興味ができてきまして」
「それで読むのか」
「純文学を」
それをだというのだ。
「織田作之助がいいと聞きまして」
「織田作か」
「織田作っていいますと？」
「織田作之助の通称だ。そう呼ばれているのだ」
「略してそれが仇名になってるんですね」
「そうだ。そしてだが」
「今その作家の本ここにありますか？」
こう栄美に問う彼女だった。
「それは」
「全集がある」

「ああ、全集出てたんですか」
「今では入手困難になってるがな」
「それでもあるんですか」
「それでどの作品が読みたい」
「ええと」
そう問われるとだった。嶺浩は難しい顔になる。
そしてだ。彼は言うのだった。
「具体的にどんな作品がありますか？」
「それは知らないのか」
「いい作家とは聞きましたけれど」
それでもだと。言外で言う彼だった。
「ですが」
「知らないのか、具体的な作品は」
「代表作は一体」
「夫婦善哉だな」
それだというのである。
「まずはそれだな」
「夫婦善哉ですか」
「まずはそれだ。それに」
「それに？」
「私個人のお勧めは世相だな」
彼にこうも話す。
「それもいい」
「世相ですか」
「そうだ、その二つでどうだ」
「それが守誠さんのお勧めですね」
「他にもあるがまずはこの作品がいいな」
「じゃあそれで御願いします」
こうしたやり取りの後で実際に全集を倉庫から出してもらって読む彼だった。何時しか織田作之助についても詳しくなってきていた。

それでだ。彼はこう栄美に話すのだった。
「何か本も」
「読んでみればいいものだろう」
「そうですね。思ったよりも」
「難しく考える必要はない」
栄美は穏やかな笑みで彼に話した。
「簡単に考えてだ」
「それで読めばですか」
「それでいい。それでだ」
「はい、それで」
「図書館ばかりでは少し退屈になる」
こう嶺浩に対して話す。そしてだ。
「今度外に出ないか」
「外ですか」
「本屋はどうだ」
彼への誘いはそこだった。
「本屋にだ。行くか」
「えっ、それってつまりは」
「多くを言わせないでもらいたいな」
デートだ。はっきりと言いたくはないというのである。
「そこはな」
「あっ、すいません」
「謝る必要はない」
それはいいというのだった。
「ただ、だ」
「本屋にですか」
「そうだ。行くか」
こう彼にまた問う。
「そこにだ」
「はい、それじゃあ」

彼もすぐに答える。
「一緒に」
「ではな。そういうことでな」
微笑んで言う栄美だった。そうしてであった。
二人は図書館から別の場所に二人で行くことになった。それがはじまりだった。二人の関係の。

図書館ではじまって　　完

5

２０１０・１１・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2194s/

図書館ではじまって

2011年4月4日21時40分発行